

Y05b 県立ぐんま天文台における天文学校

長谷川 隆、衣笠 健三、大林 均、高橋 英則、浜根 寿彦、橋本 修、倉林 勉 (県立ぐんま天文台)、西原 英治 (群馬県教育委員会)、田口 光 (群馬県生涯学習センター少年科学館)、河北 秀世、中道 晶香 (京都産業大学)、濤崎 智佳 (上越教育大学)、本田 敏志 (京都大学)

ぐんま天文台は研究基盤を備える一般公開教育施設であり、天文についての県民の生涯学習とそれを支える研究が主な業務である。平成12年度より始まった天文学校は、大きく二つの役割を果たしている。一つは参加者が天文学に長く興味を持ち続けられるような素材の提供、もう一つは参加者の天体観測技術の向上である。前者においては、天文台職員の専門が多岐にわたることをいかした多様な観測テーマの提供、多方面の天文分野の最新の成果や今後の方向性を伝えることが含まれる。参加者は、年ごとの各プログラムの中で、星団の色等級図や固有運動の測定、変光曲線の作成、銀河の回転曲線や形態分類など、有名ではあるがほとんど実測の機会がない内容を実際の自分の観測データにより再現し、自分のものとして理解を深化している。また、基本的な観測だけでなく赤外線観測や高分散観測も行ない、可視赤外エネルギー分布の測定などが行なわれた。

他施設の類似の試みと比較すると、天文学校は対象が高校生から社会人一般まで広く、少なからず県外からの継続参加がある。最低限の時間を確保することで、天体観測の背景にある天体現象を広い天文学的視点からみつめる天文研究本来の過程に挑むと同時に、最近では輪講で不断の研鑽も積んでいる。また、リピーターも多いことから同好会の様相もあり、公開天文台ならではの息の長い生涯学習プログラムとなっている。

2010年9月には天文学校生が主体となって東京国際科学フェスティバル参加イベントが開催された。学習する段階から、学習した内容を分かち合う次の段階が見え始めたといえるだろう。今後の展開について考えたい。